大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

望月長孝『古今仰恋』仮名序注の性格

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西田, 正宏
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011064

望月長孝『古今仰恋』仮名序注の性格

西田正宏

一、はじめに

以前に拙稿[1]において、望月長孝の『古今和歌集』注釈書『古今仰恋』（以下『仰恋』と略す）を取り上げ、その注釈の形成と達成について、論じたことがある。が、そこでは「仮名序」の注釈の特殊事情を鑑み、主として歌の注釈を中心に検討したのであった。本稿では、その折に簡単に考証した部分も含めて、課題としておいた「仮名序」の注釈について、考察を加えることにしたい。なお、前稿において、結論のみを示した部分もあるので、本稿では、できる限り用例を示しつつ論じることにする。

二、説話を含む注釈書の利用

既に前掲の拙稿で述べたことであるが、仮名序注の性格を明らかにしておくために、まず先行注釈書との関係について検討しておく。

『仰恋』が、その注釈のはじめに『宗祇抄』つまり『両度聞書』（版本系）を引用することは、歌の注釈の場合と同様である。その後に「師説」あるいは「師云」として、長孝の説が記される。その長孝の説のなかで、特に目立つのは、説話を多く引用する注釈書の引用である。例えば「花に鳴く鶯、水に住む蛙」の注釈に、

古キ注ニ、鶯ノ哥ハ日本記ニ、大和葛城寺ニ住僧ノ愛弟アリ。イク程ナクテ死ス。彼師ナケキテ児ノ住タルアタリヘ出テ思ヒ出テカナシミケル時、鶯来テ梅ニタハフレテナキヌ。其声普通ニカハリヌ。初陽毎朝来、不相還本栖ト聞ユ。硯ノ蓋上ニ書写シミレハ、

初春ノ朝夕毎ニハ来レトモアハテソ帰ル本ノスミカニ

ト云哥也。日本記ニハ鶯童ノ哥ト云。又蛙ノ哥ハ、是モ日本記云、紀良定ト云モノ、住吉ノ浦ニ行テ采女ニ逢テ、又来春ヲ契リテ、尋行ケルニ女ハナシ。泣々濱ヲアユミ行ケルニ、砂ノ上ヲハヒケル蛙ノ跡ヲミレハ、三十一字ノ哥アリ、

住吉ノ濱ノミル目モワスレネハカリニモ人ニ又トハレヌル

是日本記ニ河津女ノ哥ト云。サレトモ当流ニ不用説ナリ。

と、実際に鶯や蛙が歌を詠んだとする『古今和歌集』の注釈書に限らず、さまざまな文献に引用される著名な説話が引かれる。[2]「当流ニ不用説ナリ」と、結果的にはこの注釈は「当流」には「不用」の説であると長孝は退ける。けれども、このように講義を聞く門弟たちにとり、興味を惹かれると思われる説話が、『仰恋』には、すこぶる多く引用されているのである。このことは、ひとまずは、実際の講義の内容が、この聞書に反映してる結果であると考えられよう。考証や理論を述べることに終始するだけではなく、それがたとえ「当流不用」の説であるにしても、講義の場においては、具体的な例話は必要であったと思われるのである。

なお続いて、その様相を見渡しておこう。

「ちからをもいれすして天つちをうこかし…」の注釈では、そもそも始めに引用する「宗祇抄」が「能因法師の祈雨説話」を取り上げていることに端を発して、「師談」として「天河苗代水ニセキクタセ天クタリマス神ナラハ神」の歌を伴うかたちで能因説話が詳しく引かれる。この説話に関しては、長孝の歌論をまとめた『哥道或問』[3]にも、

◎能因法師は和歌をもつて、旱魃を退治し、天地のやまひをさへ治せし也。

◎能因は、仏道の人なれと、歌道の信仰すくれしゆへに、旱魃を仏道をもつていのらす、和歌を以いのれり。神もそのまことに感して、雨をふらしたまへり。

などと見えており、長孝にとって、歌道修行の結果、感応の歌を詠んだ能因は、よき目標であったのかもしれない。

続いて「カタラフモ嬉シクモナシ郭公ウキ山人トナレルト思ヘハ」の歌によって癩病が平癒したという説話が「天神地祇」が「感応」した例話として記される。さらに「又古キ物語」として、「奥山ニ枝折ルシホリハ誰タメソ吾身ヲ分テウメル子ノタメ」の歌を引く「姨捨山枝折型説話」が引用される。

続く「めにみえぬおに神をもあはれとおもはせ」の注釈では、まず引用される「宗祇抄」に「伊賀国ニ鬼ノ人ヲ損スル事アリ

シ時、土モ木モ我大君ノクニナレハイツクカ鬼ノスミカナルヘキト読テ、其事ヤミタリトイヘル事モアリ」と見え、(4)それを詳しく語る形で「師云」として「千方説話」が展開される。

是ハ天智ノ御宇ニ千方ト云逆臣、伊賀伊勢ノ国ヲ押領シ、王命ニ不随。其時軍勢ヲ度々ツカハサルレトモ、カツ事ヲ不得。彼千方四鬼ヲ手勢ニ持リ。金鬼・水鬼・風鬼・隠形鬼也。金鬼ハ、其身金ノ盾トナツテ、矢モ伐モ身ニタ、ス。水鬼ハ、敵ヲヨセテ後、水トナリテ軍勢ヲ損ス。風鬼ハ大風トナリテ、敵ノ陳屋ヲ吹破ル。隠形鬼、萬騎ノ前ニ立タレハ、味方ノ勢カクレテ思フヤウニ押ヨスル。サレハ勝負ヲエスシテ、一首ヲ読テ千方カ城ヘオクル。土モ木モノ哥也。其時四鬼此哥ヲ感得シテ、千方ハ無道ノ熊カチト詮議シテ、千方カ本ヲ立去リ、又其後千方ハ亡ヒシ也ト。

さらにこの説話に続いて、「神功皇后新羅征伐説話」が付加されている。

また「神ノ哥ニ感シタマフ」例としては、住吉の神が現形する話が引かれ、「是ハ伊勢物語ニテ口伝スル事トソ」とされている。続いて和泉式部の「物思ヘハ澤ノ蛍モ我身ヨリ」の歌と(貴船)明神の返歌が記されている。これもまた「神の感応」ということで引かれているのであろう。「男女の中をもやはらけ」の例歌としては、伊勢物語第二十三段の「風吹ハ」の歌が物語とともに引用され、さらに続けて、

又雲井草紙ニ、昔大和国ニ男アリケリ。男、其妻ヲサヒシ、又外へ通ヒケリ。然ルニ此妻恨ル心ナカリケレハ、男恠ミテ、何事カアルヤトテ、其行ヤウニテ、側ラニ陰レテ見ケレハ、前栽ノ方ヲ詠シテ居タリケルカ、鹿ノ鳴ヲ聞テ、

我モシカ鳴テソ人ニ恋ラレシ今コソネヲハヨソニノミキケ

男、是ヲ聞テ耻シク思ヒテ、ソレヨリ外へ行事ヲト、メタリ。カヤウノ事ヲ貫之ノ心ニコメテ書ルニハアラネトモ、タトヘヲトリテ、引事也。又嵯峨天皇ノ后、帝ヲ恨ミタマヒ、

ワスラル、ツラサハイカニ命アラハヨシヤ草葉ノナランサカミン

ト読タマフニ、御門、御心トケ給ヒテ、モトノヤウニ御恵アリトナン。此哥続日本記ニアリト云リ。カヤウノ事、代々撰集、物語ニ数多アリ。

と、二つの例話が記されている。また「たけきもの、ふの…」の注釈には、「師談」として伊勢物語の第五段の話が引用され、さらにその後に次の如き説話が続いて述べられる。

又中比、道ヲスクルモノ、人ノ家ニ花盛ンニミエケレハ、感ニ不堪、ヤカテ其家ニイリヌ。「遥人家花便入不論貴賤与親疎」ト云詩ノ心ニ乗シテルニヤ。ヤサシク覚エケルヲ、此家ノ主、不敵ニタケキ者ナルカ、此花見ル者ヲ恠キ盗賊ナリトテ、トラヘテカラメヲ責ハタリケルニ、男、サハク気色ハナクテ、

白浪ノ名ニハ立トモ吉野川花故シツム身ヲハウラミン

ト読ルニ、武キ心和キ、此男ヲユルシケルト也。尤哀ナル歌ナリ。是又事也。カヤウノ証例猶アマタアリ。

以上、『仰恋』が最終的に「成孝敬、厚人倫、美孝化、移風、易俗」という『毛詩』の一節を引用した後に、その解釈を施しつつ、

此文ノ心ハ、詩ノ徳ニ依テ健キアラ夷モ又武威ヲ施ス者モ、和キテ孝ヲナシ、敬ライタス。然ル時、国納リ、人倫ニアツシ。孝和ヲウルハシウシトハ、萬民ニ哀ヲホトコス姿ナリ。是等ノ徳、皆以テ詩ノ志ヨリ起リタレハ、此風ヲ移シテ俗ノアラキ心ヲ和クルト也。詩歌同根ナレハ、毛詩ノ心ヲ以テ引合セタル也。此序ノ本意ナリ。所詮二神陰陽ノ和ヨリ、於人倫君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友モ和悦ノ道ノ大徳ナリ。

とまとめるように、ここまでは、まさに歌の徳を、さまざまな説話を引用しつつ具体的に述べてきたのである。

『仰恋』に見られるこれらの説話による注釈は、細かな点では、相違するところもあり、それぞれに簡略化されているところもあるけれども、明暦年間に刊行された『古今序注』いわゆる『了誉序注』に、その根幹を仰いでいる。引用された説話の配列の一致、他の古今集の注釈書にはあまり見られない説話（姨捨山枝折型説話など）を引用すること、また出典注記の類似（雲井草紙）などから、そのことは確認されるのである。

それはそれとして、このように多くの説話を含む注釈を利用していることは、単なる先行注釈書の引用の問題にとどまらず、注意しておくべきことであろうと思われる。と云うのは、『仰恋』とほぼ同時代に成立した契沖の『古今余材抄』や北村季吟の『古今教端抄』などには、このように詳細に説話を引用する態度は、ほとんど見出せないからである。説話を背景に持つ解釈が加えられることがあっても、多く引かれることも詳細に語られることもない。それらはあくまでも仮名序の注釈の文脈上引かれたに過ぎない。『了誉序注』が明暦年間に刊行されていることから、彼らがそれを披見できなかったとは考えがたい。

季吟や契沖は、説話を引く注釈書を利用することには消極的であったのである。

それらの点を考慮するならば、『仰恋』の「当流不用」ばかりを重視し、これほど多く引かれる説話群を無視することはできないであろう。むしろ説話による解釈がわざわざ述べられていることの意味を考えるべきであろうと思われる。

例えば、契沖の『古今余材抄』のように、仮名序の正確な理解のみを追求してゆくならば、そこに説話による解釈を引用する必要がないのは、当然の帰結であろう。歌の注釈を見る限り、長孝もまた、学を追求し、先行する諸説に対し、冷静なまなざしを保持していたと思われる。少なくとも歌の注釈に説話による解釈は見られない。にもかかわらず、仮名序注においては、説話を取り込んでいる。そこには、やはり彼の積極的な意志を認めざるをえないだろう。

思うに、これほどの説話を引いたのは、長孝たちが歌を詠むという行為に極めて実際的な効能を認めていた、あるいは信じていた、もしくは、見出したいと考えていた表れではないだろうか。晩年の長孝の門弟でもあった有賀長伯の『以敬斎聞書』によれば、当時の地下の人々にとって、歌は「やことなき雲の上人なとのもて遊ひ玉へる事」[5]と認識されていたらしい。ならば、そのような「雲の上人」の「もて遊び」であるという認識を打破するためにも、歌そのものに力があるのだと、歌の効能を具体的な説話によって示すことは、すこぶる重要な意味を持っていたであろう。いま眼前に居る門弟たちの和歌修行への不安を取り除くためにも、歌の効力を説くことは、確かに必要なことだったのである。その実効性の重視が、仮名序注に、説話を多く引用させたのであろう。逆に言えば、仮名序のこの部分はそのことを説くのにもっともふさわしい部分でもあったのである。そしてこのことは、『哥道或問』に、

逢て後の愛着は、陽中の陰にてかろきなり。これらの執着を心にとめさるやうにせむに、元来、此病、自己の心根より出たる病なれは、他の力をかり、人の業をもて治しかたし。これに用る良薬、外になし。たゝ和歌也。和歌は、心の清き所より起りて、神のたすけを兼たれは、治せすといふことあるへからす。

と「恋の情」の「執着」を払うのは「和歌」しかないのだと説くことと軌を一にする考えであろう。彼らにとって、和歌は決して「雲の上人」にのみ許された「もて遊び」ではなかったのである。

三、仮名序注の歌論

二においても、仮名序の注釈と長孝の歌論との密接な関係を指摘したが、ここでは特に仮名序から離れて、「歌を詠む」行為に直接触れた部分について検討したい。『哥道或問』に説かれていたことと共に、長孝の歌論がいかなることを志向していたのかを、更に明確に探ることができると期待されるのである。

先の二の最後で見たように、〈歌を詠むことによって執着をはなれる〉ということは、例えば、

◎おほよそ人の心のうちに執着する事の有るは、尤陰気にして神の清心にたかふ。其執着する所を和哥にていひほとく時、心をのつからほからか也。

◎桜ちるとき、藤、山吹に心をうつし、藤、山吹うつろへは、又ほと、きすをきく。かやうにたのしみもてゆく心のみなれは、霞をあはれみ、露をかなしふ心とはなる也。人界のたのしみの中に淫欲尤ふかくはなれかたし。四時の景物は、あはく、はかなき物也。其あはく、はかなき物に心を（虫損）せ、淫楽のふかくして、離れかたき所をはなる、か歌の徳也。

などと繰り返し説かれる『哥道或問』のもっとも中心をなす考え方だと思われる。

そのことについて『仰恋』では「あるは花をそふとて」の注の中で、いわゆる「作国」説話を「不用」と退けた後に、

師談、…爰ヲ以テ能々思慮スヘシ。凡哥人ト云ハ、只情欲ヲ離レテ、心ヲ空虚ニシテ、聊モ物ニ執ヲト、ムヘカラサル事也。サレハ花ニ対シテハ花ヲ見、月ニ望ミテハ月ヲアハレミ、当一念々々。風景ヲ感シテ二念ヲト、ムヘカラス。シカレハ、情欲ヲノツカラハナルヘキトソ。是真実ノ教ヘ、哥道ノ詮トスル所也。

と説かれるところである。さらに「世中にある人…」の注においても、

師云、コトワサハ、世間ニナストナス事思フ事ノワサニアラス、タ、言葉ノ事也。（中略）此界ニ生ル者、其事業ナキニアラス。二六時中ノ萬ノ事業也。枕ヲトルモ、夢ヲ見ルモ、又徒ニアルト云モ、事業也。サレハ思慮遷易クシテ、哀楽変シテ、皆心ヲ苦シメテ安カラス、其事業苦シミニヒカル、所ヲサクルハ、歌也。（中略）花ヲミテハ花ヲ愛シ、月ヲ見テハ月ヲ憐ム。只当意々々ノ外、余念ナシ。サレハ此道ニ住スレハ、世間ノ是非ヲノカル。世間ノ是非ヲノカルレハ、安楽ノ世界也。

と同様のことが繰り返されているのである。

歌によって執着を払うためには、『哥道或問』に、

尤自己の歌ならては、をのか病根治しかたし。自己の哥と云は、人のいひふるさぬ所也。

と述べられるように、「自己の歌」を詠まなければならない。そのためには

古人いひのこさゝれは、全躰あたらしきといふうた、今の世にいてきかたき事なれと、修練の功によりて、てにをは一字にても、あたらしくなるやうあるへし。

と修練の大切さが説かれることになる。直接に修練という物言いは、仮名序注には見出せないけれども、「とをき所もいてたつあしもとより」の注釈のところに、

師云、裏ノ説…（中略）表ノ説ハ、我々哥ヲヨマント思ヒタツ始ヲ云。稽古次第ニ相続シテ道ノ佳境ニ入ノタトヘナリ。或ハ遠国ヘユカン人、ワツカニアユミ出テ、アナトカシナヤ、是ホトワツカニ歩ミユカンニハ、サハカリ遠キ方ヘハ、叶フマシキト思ヒテヤミナハ、行人、永久其所ヘハユキツカス。一歩ヨリ始ルト心エテ不達者ナカラモ、年月ヲワタリテ行ニ、ナトカ至ラサラン。哥ノ道如此。

とあり、稽古の大切さが説かれている。また「是前ニモ云ルカコトク興ハ哥ノ本ナリト心エテ稽古スヘキ由也」と、先の例と同様のことが、別のところでも述べられている。修練の重要性が述べられることと稽古の大切さが説かれることは軌を一にした姿勢であると見て差し支えないだろう。

以上、長孝の『哥道或問』に示された歌に対する基本的な考え方が、『仰恋』にも反映されていることを確認してきた。これは同じ長孝から発せられたことであるから当然のことでもあろう。けれども、『古今集』の仮名序の注釈のなかで、このような注釈から離れて歌を詠むことの根本原理が説かれていることに注目しておきたいのである。

四、流派をめぐる問題

古今集仮名序の注釈史を考える中で、「富士の煙」が「不立」か「不断（絶）」かと「長柄の橋」が「作（造）」「尽」なのかという点は避けて通れないであろう。最後にその点について、検討しておきたい。

以前に松永貞徳の古今集注釈書『伝授鈔』を取り上げた時に、[6] 貞徳が、宗祇以来の二条家流の伝来の説「不断・造」を退けて、諸説を検討した結果として、「不立・尽」という結論に達したことについて論じたことがある。その点について、片桐洋一氏

が「諸注集成という注釈書の形態が、このように、みづからの学統の権威ある説に対しても、是々非々的に対応してゆくという姿勢の反映として存在していたことがわかるのである」[7]と指摘されたことを受けて、さらにそれが貞徳の積極的な選択であったと評価したのである。では、長孝は宗祇説に対し、どのような立場を採り、自らの見解を展開しているであろうか。

まず結論から確認しておきたい。「富士の煙」については、

師云、他流ハ世中上古ニカハリタル事ヲ云。富士ノ煙ハ、不絶タテルカ、今ハタヽスナリ。長柄ノ橋モフリテ絶タルガ、アタラシクツクルナリト。聞人ハ何事モ上古ニカハリタレハ、哥ニノミソナクサムルトイヘル也。能キコエタリ。是冷泉家ノ説ニ大様同シ。

また、そこでも触れられていたけれども、「長柄の橋」については、引用する「宗祇抄」が、「ツクル、造也。ナカラノ橋モ、今ハ作ルナレハ、古ヌル身ノタトヘニモナラヌ心ナリ。俳諧ノ部ニテハ、尽ル也。前ニ注ス」とするのを受けて、

師云、昔ヨリ尽ル、造ル、両義アリ。トモニ用。又俳諧ノ哥モ造ル心ニテモ叶フ也。

と、いちおうの決着を見る。が、ここから長孝の例歌を示しての、長い考証が始まる。

抑不立不断、両説、二条家冷泉家各別也。冷泉家ニハ不立ノ義ヲ用ユ。煙ノタ、サレハ思ヒヲナクサメカタキ心也。橋ヲ作ル事ハ両家同義也。不立不断ニ付テ口伝等アリト云々。

と、結論めいたことを述べながら、さらにまた、国会本にしておよそ六丁半に亘って、延々と考証が続くのである。極めて優れた学的態度であると評価できるかもしれないけれども、やはり、ここは長孝の一方の説に決めることへの逡巡する心情を忖度するべきであろう。

最終的に行き着いた結果が、

…カヤウノ歌アレハ、造ルトモヨムヘシ。又尽ルトモヨムヘシ。フシノ煙モタ、ヌ時モアルヘケレト、哥ニ絶ス立ツヨウニヨミ来レハ、今モ煙タツト云コトワサ、世ニノコレリ。サレハ其コトク道ヲ学フガ正道ノ哥道ナリ。巨尺ヲイヒ、物シリタル注ヲイハンハ、実ニ博学ノ事ナレトモ、哥ノ真実ノ道ハイヒカタシ。猶口伝アリトソ。

という物言いであるのは、さまざまな諸説を検証し、何よりもその博学ぶりを披瀝した長孝自身の態度を勘案する時、それとは大いに矛盾していると言わざるをえない。長孝をはじめこの流派の人たちにとって、博学であることが、歌道の本質を究め

たことにならないと考えていたらしいことは、先にも引いた長伯の『以敬斎聞書』の「哥学とよみかたの事」の項目の中で、

師云、いかに哥学ありても、よみ方の伝なきものは、真実の所をしらす。たとへは、佛道の上にても、学者と道人とのことし。何程学文は廣くし侍りても、道心なくては、実の道にはうとかるへし。たとへ学文なくとも、道心堅固なれは、真の佛道者なるへし。学文廣くして、我か博識にまかせて、口に云のゝしるとも、道人に出合て、唯一言の下に閉口すへし。哥学は、様々と故人の書残したる事多けれは、夫を知る迄也。よみ方の傳を得て、哥道を知るは、是即道人也。其故は、哥をよみ出すは、仮初の所行にあらす。実は、心地より発る所にして、心法のさた也。哥学をのみ廣くしける人も、よみ方の傳をしれる人に逢ては、一言の下に閉口すへし（以下略）。

と、述べられていることからも明らかであろう。にもかかわらず、ここでの饒舌ぶりは、二条家流という大きな流派の説とそれに真っ向から対立する直接の流派の師である貞徳の説との齟齬に加え、さらに長孝自身の考えとの折り合いを如何につけるかの、その苦心の表れでもあろう。彼らにとっては、やはり「流派」や「伝授」の問題は、避けては通れなかったのである。

五、おわりに

以上、『古今仰恋』の仮名序注の孕む問題について、検討を加えてきた。歌の注釈においては、伝授思想をはじめとする中世の残滓の面ばかりが注目されてきた点を省みて、『仰恋』の達成が今日でも評価の高い契沖の説に劣っていないということに、主に焦点を当てて論じた。が、仮名序注に限って言えば、むしろより中世の古注の影が、色濃く残っている。しかし、論じてきたように、それは消極的に評価するべきではなく、その饒舌なまでの諸説の羅列にこそ、長孝の主張するべき歌論があったのである。

【注】

1 拙稿「望月長孝『古今仰恋』の方法と達成―地下歌人の古典学―」（『国語国文』第73巻第12号、二〇〇四年十二月刊）参照。

2 先行するどの注釈書によっているのかは判断が難しいけれども、細かな点（人名など）に注意すれば、この場合は、『毘沙門堂旧蔵本古今集注』系の注釈書に拠っていることが確かめられる。

3 引用は、基本的に祐徳稲荷神社中川文庫蔵本によるが、一部虫損の甚だしいところもあるので、天理図書館蔵本を参照し校訂した。なお『歌道或問』については、拙稿で主にその歌論の特徴について論じたことがある（「近世初期地下歌学一斑―望月長孝『哥道或

問』をめぐって―」、『大阪市立大学文学部創立五十周年記念　国語国文学論集』、一九九九年六月、和泉書院刊）。

4　既に前述し、また前掲の拙稿でも指摘したが、ここもまた、引用する「宗祇抄」が版本系である証左となる。尚通本にはこの和歌の引用はない。

5　『以敬斎聞書』は国会図書館本による。「和歌も修行至れはひともゆるす事」の項。ここは長伯が、医者を志し京都に遊学したが、和歌の道に転じたことなどについて語るところ。長伯が医学修行を怠り、和歌を志していること聞きつけた親類が、長伯をいさめる文のなかでの物言いである。当時の地下の人々の和歌に対する認識の一例と考えてよいだろう。

6　拙稿「貞徳歌学の方法―『傳授鈔』を中心に―」（『文学史研究』第35号、一九九四年十二月・大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会刊）。

7　片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題六』（一九八七年六月、赤尾照文堂刊）。

（にしだ　まさひろ・本学助教授）